

人工妊娠中絶に対する心理的援助の可能性を探る  
～ 赤ちゃんを愛し続ける女性の語りから～

立命館大学応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
夏目 ころ

本研究は、人工妊娠中絶（以下、中絶とする）の当事者に関する研究である。日本は戦後、欧米に先駆けて中絶を合法化した。その理由の一つは女性の健康と生命、そして権利を守るために必要であったことが大きい。だが日本では中絶を容認する価値観と批判する価値観が社会においても個人においても混在しており、中絶が良しとされない風潮の中で当事者は体験を押し込め自らを責めて苦しみ、中にはそれゆえに深刻な精神症状を引き起こす当事者もいる。当事者への適切な心理的援助の可能性を探ること、また社会に知られることの少ないありのままの中絶の姿を描き出すことを目的として、筆者は本研究に臨む。

対象は、中絶経験の当事者である女性 A さんである。別の場所で一度顔合わせをした後、筆者と A さんの 1 対 1 で、プライバシーの守れる K 市 R 大学の一室にて、一回 1 時間半～2 時間程度のインタビューを 2 回行った。得られた語りデータの分析は、インタビュー内容からの逐語記録を作成し、高田（2004）による中絶経験の複数経路・等至点モデルを参考にして A さんの行動や思いを記述し、考察することとした。データからは、A さんの経験した中絶の姿とそれにまつわる思い、そして A さんに関わった様々な人の姿、それによる A さんの意識の変化が明らかになった。様々な人との関わりによって A さんは自分なりに中絶という経験と向き合い、消化していったことが分かった。

そして得られたデータからの考察を進めていくと、A さんが中絶という経験をどのように受け入れていったのか、そして中絶から学んだことをどのように生かしていくのかという姿と、当事者の視点を通した中絶を取り巻く社会の問題点が浮き彫りになった。現在中絶の予防に偏りすぎている性教育や、中絶をそれのみではなく出産につなげて考えることや、肉体的な概念にとらわれない赤ちゃんの存在を認めるなど、社会が中絶を捉える視点を変えていくことも必要である。

中絶を取り扱う産婦人科という現場には、そして中絶を経験して苦しんでいる当事者には、「現在の自己の肯定」を手伝うような心理的援助の可能性が存在する。中絶に「手術」という形で関わる医師や看護師とは別に、当事者である「人」に関わる心理臨床家の重要性を述べる。中絶という概念だけを取り上げるのではなく、社会が、そして専門職者が当事者一人一人の物語に目を向けてサポートができたならば、当事者はそれぞれの経験を未来へ向け、中絶経験を人生の糧として前向きに生きることができるようになるのではないだろうか。